

## 基本理念

草加市立病院は、市民のいのちと健康を守り、地域医療の中核を担うことを使命とします。

# 草加市立病院

## 医療危機を乗り越える!

年間外来受診者数は草加市の人口とほぼ同じ



近年、高度医療を必要とする診療が増えるとともに、専門医志向が高まり、市立病院を受診する患者さんが増加しています。このような中、当院では診療体制を充実させるため、医療スタッフを毎年増員しています。しかし、症状が比較的軽い患者さんも市立病院に集中しているため、二次医療機関としての役割が十分に果たせないだけでなく、診療体制の崩壊も懸念されています。

### 診療の充実を図るため 医療スタッフを増員

平成19年度の当院の延べ外来受診者数は、草加市の人口にほぼ匹敵する22万0465人、延べ入院患者数は8万7676人でした。当院ではこの状況に対応するため、関連大学の東京医科歯科大学に医師派遣の要請をするほか、看護師を随時募集するなど医療スタッフの確保に努めています。

### 緊急手術に数多く対応

市立病院は二次救急医療機関として、24時間365日、入院や高度医療を必要とする重症の患者さんの救急診療を行っています。脳神経外科においては、

同科が扱う疾患の性格上、救急患者が多く、一刻を争う緊急手術が全体の6割以上を占めています。また、「脳神経外科の医師3名が年間約190件の開頭手術を行っています。この件数はおそらく県内ではトップクラス」と高元病院長は話します。

### 小児夜間二次救急の 当番日が年間の約43%

小児科では草加・越谷・八潮・三郷・吉川市、松伏町に点在する複数の病院で構成する輪番制(当番制)の夜間二次救急医療に参加しており、夜間や休日に同地域内の重症の小児救急患者を優先的に受け入れています。平成19年度は4病院が参加しましたが、市立病院が当番日となったのは157日。年間の約43%を占めました。

### 患者さんのニーズは 多様化

このように医療スタッフは昼夜を問わず懸命に診療にあたり、現在の医療環境を維持しています。特に救急医療においては、担当スタッフはほとんど不眠不休で働き、翌日も患者さんの外来診療や病棟業務があるため、必ずしも休めるわけではありません。そのような中、当院の外来を受診する患者さんが年々増加しています。これは医療技術の進歩や病院情報の開示が進む中で、高度の医療機器や技術が必要とする診療が増大し、同時に診療を受ける患者さんの「子どもを小児科専門医に診てもらいたい」「内科領域でも専門医の診察を受けたい」という専門医志向が強まり、地域の診療所や医院で

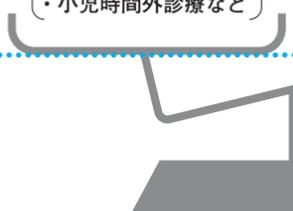
## 医療スタッフを増員しても厳しい状況

### ニーズの多様化による 患者さんの増加

- 高度で専門的な治療
- 専門医志向
- 小児時間外診療など

### 市立病院の 医療スタッフ増員

追いつかない部分



このような重症の小児救急患者の受け入れを含め、市立病院小児科の平成19年度の時間外診療受診者

数(休日や夜間帯における受診者数)は7747人で、全診療科の時間外診療受診者数の約48%でした。

### 多様なニーズに応える ためにより一層の 地域医療連携を推進

市立病院では、現状の診療体制をさらに充実させ、患者さんの多様なニーズに

高元病院長は、「病院の医療スタッフは無限ではあ

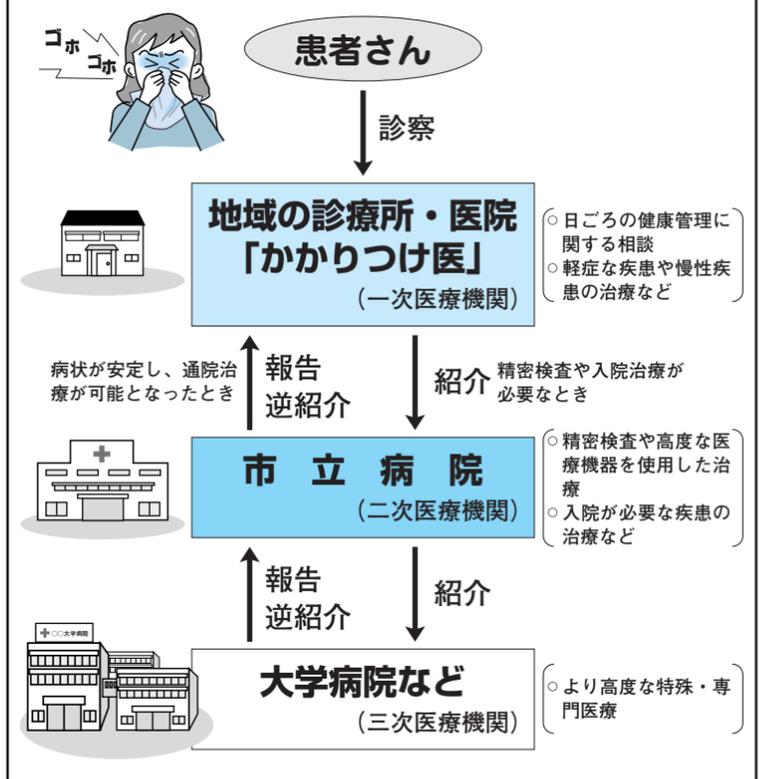
### このままでは診療 体制の崩壊も

この状況が続く、軽症の患者さんが集中して診察に訪れた場合、人手が足りなくな

これは、患者さんの病気の

市立病院では医療危機を

## 地域医療連携のしくみ



# 休日・夜間の小児救急体制を 考える

—草加市小児・救急医療問題懇話会から—

厚生労働省の調査によると平成19年10月時点で人口10万人当たりの病院勤務医師数が埼玉県は99.5人と全国最少でした(全国平均は143.9人)。医師不足は特に小児科や産婦人科、救急医療が顕著で、それに伴う過酷な労働環境も問題となっています。一方で、休日・夜間の小児救急体制の整備も課題となっています。市では医療環境の向上を目指し、これからの小児救急のあり方を検討しようと「草加市小児・救急医療問題懇話会」(座長 佐藤達也草加八潮医師会副会長)を組織しました。懇話会では、小児一次救急に特化した新たな夜間急患診療所の設置を目指すなど様々な意見が交わされました。



## 市立病院の時間外診療 医師に大きな負担

**佐藤(座長)** 平成19年度において、草加市立病院小児科に時間外診療で来院した患者数は7747人。これに対して、市立病院小児科の常勤医師は5人(20年度は6人)。当直時間帯に医師1人で1日20〜30人の患者さんの診療をしており、大きな負担がかかっているのではないだろうか。この状況を改善していくことや現在利用者の少ない保健センター内の夜間急患診療所のあり方をこの懇話会で検討していただければと思います。

**熊谷** 私は小児科医として氷川町で開業しています。例えば、自分のところでは対応できない二次救急の患者さんが来たときには、市立病院に

連絡をとったうえで「すぐに行くように」と指示しています。ところが患者さんによってはすぐに行かず、夜間になってから、まさに「コンビニ感覚」で診療を受けに行く人もいます。そうすると市立病院の医師の負担はますます増えるわけで、こういった人への啓発をどうするかは大きな課題だと思っています。

**桂** 確かに親が働いているから「診療時間内では無理」という理由もわからないでもないですが、医師も生身の人間です。やはり病院にかかる側への啓発は必要だと思います。

**城石(副座長)** 私も子どもの親として、こういった気持ちもわかりますが、このままでは市立病院の診療体制が崩壊してしまいます。この懇話会でもより良い小児救急体制のあり方について皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

**芳澤** 啓発活動とともに、市域を越えた当番医制など、医師が辞めない体制づくりを検討してはどうでしょうか。

**高元** 親の意識として、設備が整っていないから夜間急患診療所に行か

ないということもあると思います。また、検査機器が充実していない問題があります。夜間急患診療所の1日平均患者数が2〜3人に対し、市立病院は約30人。市立病院の医師が疲れきってしまうので、何とか助けたいです。

**高元** 親の意識として、設備が整っていないから夜間急患診療所に行かないというところもあると思います。また、検査機器が充実していない問題があります。夜間急患診療所の1日平均患者数が2〜3人に対し、市立病院は約30人。市立病院の医師が疲れきってしまうので、何とか助けたいです。

## 夜間急患診療所の小児患者は 1日2〜3人

**福田** 市立病院の大変さはよくわかりましたが、保健センター内の夜間急患診療所についてはどうなっているのですか？

**佐藤** 医師会加入の内科、外科、小児科の医師が持ち回りで日曜、祭日を含めて対応しています。平成19年度に夜間急患診療所を利用した小児患者数は973人でした。

**福田** 利用する側としても現在の夜間急患診療所は場所がわかりにくいので、新たな施設をつくり、救急対

## 充実した 一次救急施設の必要性

**佐藤** やはり一次救急に医師会が協力するようなシステムが必要ですね。今後の方向性としては、医師を集約させ、例えば市立病院に隣接した場所に新たな施設をつくり、そこで小児一次医療を行えば、二次医療との連携も可能ではないでしょうか。現在の夜間急患診療所については1日2〜3人の患者さんしかおらず、機能しているとは言い難いですし、無駄があるように思えます。

## 草加市小児・救急医療問題懇話会委員

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 高山 幸一郎 (草加市保育園父母会連合会) | 福田 誠一 (草加市PTA連合会)    |
| 城石 和彦 (社団法人 草加青年会議所)  | 佐藤 達也 (社団法人 草加八潮医師会) |
| 熊谷 昇 (社団法人 草加八潮医師会)   | 桂 一平 (草加歯科医師会)       |
| 芳澤 正士 (草加薬剤師会)        | 高元 俊彦 (草加市立病院)       |
| 土屋 史郎 (草加市立病院)        | 石田 幸治 (草加市)          |
| 根本 政広 (草加市)           |                      |



## 未来ある子ども達のために

(社)草加青年会議所 城石 和彦

今回の懇話会に参加して強く感じたことは、委員である市民、医師会、市職員が一日も早く草加市の医療体制を今以上に充実させたいと考え、会議に臨んでいたことです。いろいろな意見が飛び交う中、参加者の一致した意見として「市立病院内構想」を市長に提出させて頂きました。この構想は現在、保健センター内で医師会が行っている夜間一次医療を市立病院内に移すというものです。本年、私の所属する(社)草加青年会議所でも草加市の医療体制の充実をテーマに調査・研究し、獨協大学の学生達とともに多くの協力を得て、医療マナーについての自主映画やマンガの製作を行いました。関係者からも新たな夜間急患診療所の早期実現を望む声が出ています。未来ある子ども達のためにも一日も早く実現したいと私は願っています。



## 草加の小児夜間救急の充実に期待

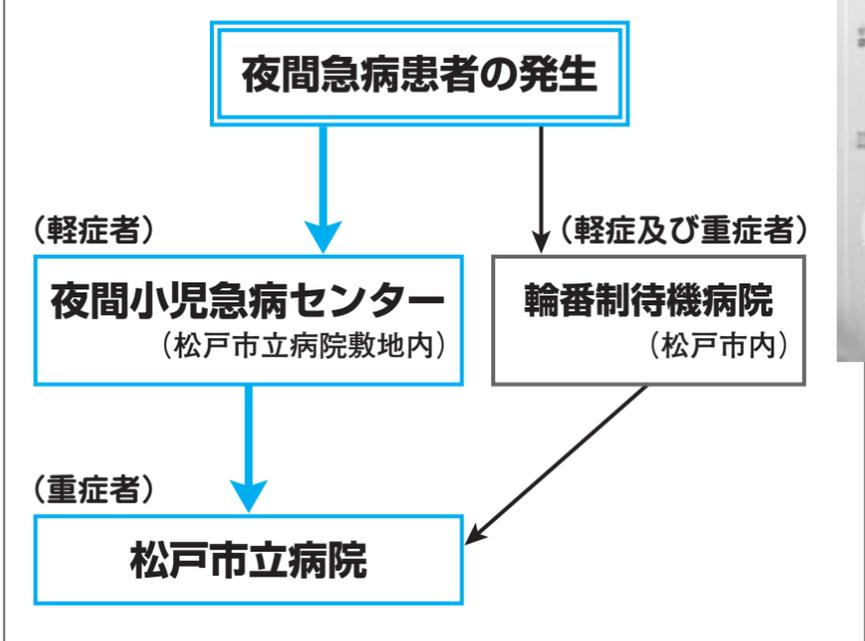
草加市保育園父母会連合会 高山 幸一郎

小さな子どもをもつ親として一番心配なのはやはり「子どもの健康」です。とりわけ、かかりつけの診療所が終了してしまう夜間に起こる子どもの体調悪化にはとても不安を覚えるものです。そんな時に頼りになるのが市立病院ですが、今回「草加市小児・救急医療問題懇話会」に委員として参加して、市立病院の先生方がフル回転しながら私たちの子どもを診てくださっていることを知りました。懇話会では、そうした先生方の負担軽減につながる小児夜間診療所の設置を目指す議論がなされました。比較的症状の軽い子どもを夜間診療所で、救急対応が必要な子どもを市立病院でそれぞれ診察していただく。この二つの施設が同じ敷地内にあることで連携しながら運営されれば、子どもをもつ親としてこんなに頼もしいことはありません。草加市の小児夜間救急の充実のため、ぜひ実現してほしいと大いに期待しています。

## 懇話会委員の声



## ■松戸市の小児救急医療システム



軽症であれば原則として夜間小児急病センターを受診するよう呼びかけています。ただ、異物誤飲、気管挿管しているなど明らかに重症の場合は当初から市立病院または輪番制待機病院を受診することになります。

応可能ないい条件であれば市民としては歓迎です。しかし、設備投資等で費用がかかるわけですから、施設をつくらずに現在の市立病院内にその機能を持たせていくのはどうなのでしょうか？

佐藤 当初は病院内で行うという手法も考えたのですが、一次と二次が同じ場所ですと患者さん側も混乱してしまう可能性があります。別々の建物で行うのがより良い方法だと考えています。現在の夜間急患診療所でもそうですが、一次救急で来るとすぐ一杯になってしまいます。災害時などを含めて、トリアージができる場所の確保ができ、直接市立病院へ

行かない仕組みがいいと思っていま

芳澤 仮に施設を移したとしても、市立病院の医師数は変わらないし、週70時間という勤務時間が減ることにはならないのではないのでしょうか？そこを考えると意味がないと思うのですが。

桂 先日、千葉県の松戸市立病院の事例をテレビで放映していました。一次救急を担う夜間小児急病センターの運営には医師会の協力が不可欠というものでした。

熊谷 準夜帯だけの診療でしたら私も協力できると思います。

土屋 医師会の先生に準夜帯に診て



松戸市の一次救急施設を参考に

佐藤 これまでの議論から、先日、病院敷地内の別施設で小児の一次救急を行っている松戸市夜間小児急病センターを視察しました。小児科医が草加市立病院の3倍いて、さらに夜間の小児一次救急に医師会の耳鼻科や外科の医師も協力する体制がとられて大変素晴らしいと思えました。草加市でも同じようにやるとすれば、小児科医だけで体制をつくる

いたければ、待機という形で食事、病棟業務など自分の仕事ができ、精神的な負担は減るので助かると思います。

高元 これが可能であれば二次救急の受け入れもスムーズになります。また、一次救急で診た患者は、翌日に地域の先生方にかかるようにし、二次救急が必要となったら市立病院を受診するということもできます。

高元 診療時間も決まないと病院医師の負担が軽減されません。

佐藤 市立病院の夜間受診患者は午後10時以降は減っていますので、例えば午後7時から10時までとか。

高元 午後7時にしておけば医師会の先生方が間に合わなくても、それまでの間は市立病院医師での対応はできると思います。

高山 午後7時もしくは7時30分であれば、親側も何とか我慢できると思います。

佐藤 草加で実施する場合は松戸ほどの医師がいないので一部我慢することが出てきます。小児科医が少な

るの難しいと思います。

桂 松戸市と比べると医師数に圧倒的な差がありますね。そうなること、実施した場合に長続きできるか心配です。

佐藤 現在、草加八潮医師会に加入している8割の医師は何とかしなくてはならないと考えています。しかし、実際の協力が得られるかどうかですね。現実には夜間急患診療所の運営でも土・日曜日は大学病院からの派遣に頼っている状況です。今後、詰め作業が必要ですね。

高山 資料を見る限り、松戸市夜間小児急病センターは平屋で約160平方メートルで手狭な感じがしますが、実際どのような印象を持ちましたか？

佐藤 待合場所はやや狭かったですが、ただ、ポケットベル10個が用意され、患者さんの呼び出しが可能になっていて、車内で待機できるようになっていました。

桂 実際に草加で実施する場合、どの程度のものをイメージしていますか？

佐藤 建物は松戸市と同じ程度で、診察室は3部屋あればよいのではないかと考えています。

実施は医師会との協力で

高元 松戸方式と同様のものを実施する場合、議会との調整等を含め、建物がかかるまで少なくとも3年はかかるかと考えています。その間、当面は草加市立病院内で既存の設備を使って実施することになると思います。医師会と協力体制をとり実施していく方向で詰め作業を行っていきたくと考えています。

草加市小児・救急医療問題懇話会では、これからの小児救急体制について検討した結果を取りまとめ、木下市長に報告しました(右写真)。



左から佐藤座長、城石副座長、木下市長

## ■小児夜間救急の充実に向けて

- 草加市立病院敷地内に小児医療に特化した夜間急患診療所の設置を目指す。
- 草加市立病院勤務医師の負担が軽減されるような仕組みを検討する。
- 市民に向けた啓発活動を展開していく。

## 先進事例

### 松戸市夜間小児急病センター (千葉県松戸市)



松戸市夜間小児急病センター(上写真は松戸市立病院、右写真は隣接。診療は午後6時~11時)。



松戸市立病院 小児科部長 小森功夫医師

48万都市の小児一次救急を支える松戸市夜間小児急病センター。平成18年4月に開設され、松戸市立病院小児科医師1名のほか午後8時から地元医師会の医師2名が加わり、15歳までの軽症(一次救急)の内科系疾患を対象に診療を行っています。

これまでは市立病院から約2キロメートルほど離れた場所に小児夜間診療所があり、午後8時から11時まで診療を行っていました。しかし、小児救急の充実を図るため、現在の体制になってからは診療開始が2時間早まり、午後6時からとなりまし。重症であれば隣接の市立病院を紹介し、平成19年度の患者数は9558人でした。

一次救急を行う同センターでは、診察が終わると医師はカルテの写しを患者さんへ渡し、翌日に地域の診療所のかかりつけ医に報告するよう説明しています。ただ、診察により高度な治

## 市立病院とのスムーズな連携で安心感

療や入院が必要と判断された場合は、市立病院へ連絡し紹介のうえ、受診してもらうように指示しています。また、緊急の場合は医師と看護師が付き添ってストレッチャーで患者さんを搬送します。

夜間小児急病センターが市立病院敷地内に設置されて約3年。松戸市立病院小児科部長の小森功夫医師は、「地域の先生方も顔を合わせて意思疎通ができ、より質の高い医療を患者さんに提供できています」と話します。一方、利用する方の中からは、「ここで健診を受けさせてほしい」「薬は3日分くらいないと困る」と要望する声も。

小森医師は「センターに来て診療するのは、それぞれの医療機関で勤務が終わってから働く有志の医師であること、そして急病のお子さんにとってのセンターの役目であることをもっと理解していただきたいですね」と話していました。

松戸市立病院	
病床数	615床
診療科	24科
(院内標榜科目)	3科含む
小児科常勤医師数	17名
(平成21年1月1日現在)	

# 医療安全への取り組み

—患者さんの安全を確保するために—

市立病院ではスタッフの医療安全に対する意識を高め、安全・安心な医療を提供するため、「医療安全管理委員会」を設置しています。同委員会ではスタッフ一人ひとりの事故防止対策を推進するとともに、委員会が中心となった組織的な活動も行っています。今回は医療安全対策として実際に市立病院が行っている取り組みの一部をご紹介します。

## スタッフ一人ひとりの事故防止策

### お名前の確認

市立病院では、採血や注射、処置、検査、手術など医療行為の場において医療スタッフが必ず患者



入院患者さんにはリストバンドの装着をお願いしています

さんのお名前を確認しています。「お名前を確認させていただきます」という医療スタッフのお願いに対し、患者さんがお名前を言っていないことで誤認を防止しています。

### リストバンドの装着

また、入院患者さんにはリストバンドを装着させていただいています。このリストバンドは手術や点滴、注射、輸血などを行うときに患者さんご本人であることを確認するためのものです。リストバンドには、氏名、性別、入院病棟名が記入され、入院時のオリエンテーションの際に看護師が患者さんの名前を確認したうえで、手首に装着させていただきます。

### 厳重な確認作業

輸血や点滴などに使用する製剤は医療スタッフが厳重に確認作業を行っています。

例えば輸血の場合、まず臨床検査技師が医師から提出された輸血申込書に記載されたID番号、氏名、血液型、輸血歴などを確認し、輸血する血液製剤が患者さんに適合するか検査します。安全が確認



情報の読み合わせ

されると、適合した証明として「適合書」が発行されます。

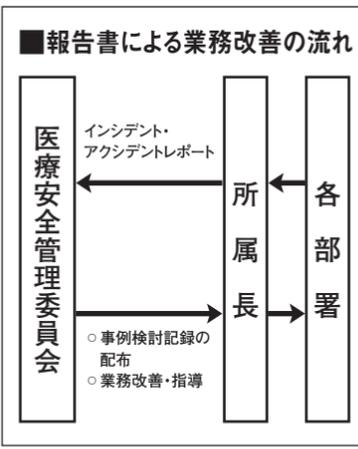
その後、血液製剤が患者さんへ届くまでには、医師や看護師、臨床検査技師が2人以上で「適合書」をもとに、患者さんの情報と使用する製剤が一致しているか繰り返し読み合わせを行います。輸血直前には患者さんご本人にもお名前を言っていたいただき、確認がとれたうえで輸血を開始します。これらの確認作業は輸血終了時まで行われ、輸血中も発熱や血圧低下などの副作用がないか患者さんの

## 医療安全管理委員会での取り組み

### インシデント・アクシデントレポート制度

医療事故を防ぐために重要なのは現場で働くスタッフからの意見や問題提起です。

市立病院では各診療科、病棟などのスタッフからインシデント・アクシデントレポートを随時回収しています。このレポートは、ついうっかりしてしまった出来事や、



## 輸血実施における確認作業

- ①臨床検査技師による確認
  - ・輸血申込書と患者さんの情報を確認
  - ・血液の適合検査による安全性の確認
- ②臨床検査技師と看護師による確認
  - ・適合書と血液製剤に添付された情報の読み合わせ
- ③看護師と医師による確認
  - ・輸血実施前に適合書、血液製剤、患者さんの情報を読み合わせ
  - ・輸血中には患者さんの状態を観察
- ④臨床検査技師による確認
  - ・総合的な最終確認

状態を常に観察します。輸血終了後、これらの情報が看護師から臨床検査技師に伝えられ、副作用がなかったかなど最終確認が行われます。伝えられた情報は患者さんの輸血歴として厳重に保管され、次回以降、安全な輸血療法を行うための重要な情報として役立てられます。

このように医療スタッフが繰り返し確認作業を行うことで医療の安全を確保しています。

間違いを起さそうになったことなどを記録しておくもので、実際に現場で起こったことや事故を防ぐための提案が書き込まれます。レポートをもとに具体的な対策が医療安全管理委員会です話し合わせられ、その内容は各部署のスタッフへ報告されます。

「実際に起きたことを隠さず、どんな小さなことでも報告すること。そして、重大事故につながらない業務手順や確認の仕組みを整備し、スタッフ全員が共有することによって業務改善が図られ、事故を防止することにつながっていくのです」と医療安全対策を担当する高橋日子看護部副部長は話します。

医療の安全を確保するうえで何より大切なのはスタッフ各個人の医療安全に対する意識です。今後も医療の現場で事故が起きないよう、医療安全管理委員会を中心に安全対策に取り組んでいきます。

## 病院の窓



草加市病院事業管理者 (兼) 病院長 高元俊彦

最近メディアを通して産科、小児科、救急といった分野での医療崩壊が報道されています。特に不採算部門の医療サービスを担当する病院の経営悪化は深刻で、これまで有名病院といわれた医療機関が次々と診療休止や規模の縮小に追い込まれています。

この要因として、国による医療費抑制政策や医師養成制度の不備もありますが、公的病院の弱点として、これまで形式や規則ばかりにとらわれるあまり、改革への意思決定が遅く、時代に追いつけない状況がありました。

しかし、医師不足などの厳しい医療環境にもかかわらず、草加市立病院はどの

## 市民から信頼を得ること、そして健全経営を目指しています

自治体にも優る市議会の支援と強い行政力によって年々業績を伸ばし、改革のスピードを加速してきています。

これからの草加市立病院は脳血管障害、心臓病、癌など高次医療機関としての機能も発揮できるように先進的な病院としてさらに発展させ、市民の皆様にご覧の財産として共有していただきたいと願っています。

そのために、健全経営を図りながら我々が自らの使命を誠実に果たすことは重要です。そして、市民の皆様にも自らの町に働く医療者の良き理解者となつていただき、お互いが信頼し合いたいと思います。

## 【産婦人科】 腹腔鏡下手術専門外来を開設

今日では腹腔鏡下での手術が一般的になりつつありますが、それでもまだ専門性の高い手術領域と考えられます。

市立病院産婦人科ではその専門分野の医師が、診断～手術～その後のフォローまで一貫した治療を行っています。

また、当科では週3回の腹腔鏡下手術日を設けているため、現在のところ診断から手術までの待ち時間が約1か月と比較的短めとなっています。

診察日	毎週木曜日
診察時間	午前9時～正午
対象疾患	子宮筋腫、卵巣腫瘍、子宮内膜症、不妊症、一部の婦人科悪性疾患
診察内容	腹腔鏡下手術全般の相談
受診方法	原則として予約制です。 月～金曜日の午前9時から午後5時までに産婦人科外来へ電話予約を。 ☎946・2200